

# 立命館大学大学院言語教育情報研究科主催公開講座 「英語学と英語教育の接点」

主催：立命館大学大学院言語教育情報研究科

この情報は、転送自由です。

第2回は、**2025年7月27日（日）**に開催します。

実施形態：対面

会場：立命館大学衣笠キャンパス（京都市北区等持院北町56-1）  
平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルーム

立命館大学衣笠キャンパスのキャンパスマップ：

<https://www.ritsumei.ac.jp/campusmap/kinugasa/>

立命館大学衣笠キャンパスへのアクセス方法：

<https://www.ritsumei.ac.jp/accessmap/kinugasa/>

参加費：無料

申し込み：不要

問い合わせ先：takizawa[アット]li.ritsumei.ac.jp

10:40-12:00：滝沢直宏「-ly 副詞の語法文法 - 英語表現との接点を考える」

概要：現代英語には、形容詞に接尾辞-ly を付けて形成される-ly 副詞が多く存在する。対応する形容詞の意味や用法から副詞の語法や文法的働きが推測できる場合もあるが、常に可能とは限らない。たとえば、基本的な形容詞である fresh の意味を知っていても、対応する-ly 副詞である freshly の典型的用法である「freshly+過去分詞」は推測できない。同様に、副詞 abundantly が abundantly clear というコロケーションでよく使われることを、形容詞 abundant から予測するのはほぼ不可能である。こうした-ly 副詞の語法や文法を知るには、体系的なアプローチが不可欠である。大規模なコーパスを用いた用例分析も有力な手法の一つである。本講演では、豊富な例と共に様々な-ly 副詞の用法を取り上げ、ly 副詞と英語表現との関係を考えてと共に、コーパス利用の方法論についても言及する。

12:00-12:50：昼休み

12:50-14:10：山崎のぞみ「現代英語の変化と英語教育」

概要：一般に、語彙の変化に比べて文法の変化は緩やかであり、短期間では捉えにくいとされている。しかし、英語の文法は 20 世紀以降、様々な変化を遂げてきた (Bauer 1994, Mair 2006, Leech et al. 2009)。とりわけ、British National Corpus 2014 (BNC2014) の編纂により、BNC1994 との比較が可能となり、過去 20 年という比較的短い期間にも文法的变化が確認されている。言語の変化 (change) はしばしば言語の変異 (variation) を伴い、特に話し言葉においてその傾向が顕著である。本講座では、現代英語に見られる多様な変化や文法的変異を取り上げ、標準の認識や容認可能性がどのように変化しているかを考察する。また、文法的・規範的な形式と、そこから逸脱した周辺の形式との関係にも注目する。さらに、英語教育において、こうした進行中の変化をいかに扱うべきか、そして教育現場ではどのような英語をモデルとするべきかについても論じる。

14:20-15:40：David Coulson 「英語単語の読みの困難：日本人学習者は音韻的欠如のテストでどのような成績を示すか」

概要：異なる言語における語認識プロセスには、それぞれ特有の音韻的処理が関与する。特に外国語学習では音韻的スキルが未発達だと、語のデコード（音声化）に困難を伴うことがある。本講演では、Wydell と近藤（2003）による失読症の日英バイリンガルを対象とした研究を再現し、日本人大学生における英語語認識スキルの音韻的側面を習熟度別に検証した結果を報告する。検証の結果、語認識スキルが著しく未発達な学習者層が存在し、特に低習熟度グループの平均スキルは、Wydell と近藤の示す英語読解困難者の水準に近かった。これらの学習者が必ずしも失読症とは断定できないが、一部に英語における失読症の可能性があることも否定できない。本研究は、日本の英語教育における読解スキル発達の不十分さを示しており、今後はフォニックス指導の継続と第二言語としての広範な読書経験の導入が重要であることを提言する。

15:45-16:15：全体討論